

## 外国人の子どもたちに日本語を教えるため、各地の指導者と市民が結集してフォーラムを開催。

日本語指導を必要とする日本在住の外国人の子どもたちが増えている。彼らの中には日本語ばかりか、母語すら不完全な子どももいる。また、その多くが子どもから大人へ成長する微妙な段階にあり、人格形成にも影響を及ぼしている。こうした子どもたちの生の声に耳を傾けるとともに、各地の日本語指導の実践報告を学び外国人の子どもたちの学習支援を考えるための市民フォーラムが開催された。



いくつものグループに分けて授業を行う様子

### 試行錯誤を重ねてきた各地の日本語授業。

現在、日本の学校に在籍して日本語指導を必要とする外国籍の子どもの数は2万3,500人と言われている。この数字は文部科学省発表の数字だが、日本語教育が必要かどうかは担当教員の判断に委ねられているので、あいまいな数値だ。実際には学校に通っていない子どももいるので、日本語指導が必要な子どもの数はこの数倍はあるという説もある。外国人の児童や生徒は義務教育の対象ではないが、希望があれば日本の小中学校に入れる。しかし多くの場合、日本語学習の支援がないため、授業についていけずドロップアウトしてしまう子どもも少なくない。これは、日本人の帰国子女にも当てはまる現象だ。

こうした子どもたちに日本語を教えるため、各地域でいろいろな取り組みが行われている。

NPO 法人 国際日本語コミュニケーション研究所もそのひとつで、平日の17時30分から19時30分までの2時間、東京都渋谷区の子どもたちに日本語と一般科目を教えている。

同研究所 副理事長の渡邊晋太郎さんは、現状について次のように説明する。

「2009年の発足ですから、まだ歴史は浅いのですが、25名ほどの子どもたちが通ってきています。渋谷区には大使館も多く、国籍は7～9カ国になります」

この1年、渡邊さんたちの活動は試行錯誤の連続だった。当初は1年の前半で日本語を重点的に教え、後半で



児童の日本語習熟度に合わせて授業が進んでいく

授業内容を工夫し児童の学習意欲向上を目指す



一般科目を教える予定だったが、そううまくはいかなかった。一般科目がどんどん遅れてしまうのだ。さらに同学年の子を1グループとして授業を行ってみたが、これも頓挫した。個人によって日本語習熟の速度がまったく違うのだ。遅れた生徒は当然おもしろくなく、学習意欲はますます低下してしまう。

そこで、ある段階の子どもから日本語と一般科目を並行して教えることにし、授業グループも3ヵ月程度で編成変えを行うことにした。その効果はすぐに表れた。中国人の子どもたちに通訳をつけて、数学を指導したところ、急速に学校の成績が上がったのだ。

「この子たちは入学した頃は遅刻の常習犯だったのですが、今では授業の30分前に机についていますよ」と渡邊さんは笑う。

わずか1年ではあったが、この日本語教室には多くのノウハウが集まった。そこで渡邊さんが考えたのが、全

国各地にある子ども向けの日本語教室を連携させ、ノウハウや情報交換のネットワークを作ることだった。

### 地域によって状況は

千差万別でマニュアル化はできない。

2010年2月27日、文化女子大学にて「外国人の子どもたちの学習支援を考える市民フォーラム」が開催された。

「ネットワークづくりとともに、この問題を解決するにはそれぞれの地域の市民の理解と協力が必要と考え、市民フォーラムとしました」(渡邊さん)

学校法人 文化学園 文化外国語専門学校校長である大沼聡さんが開会のあいさつを行い、その後名古屋外国語大学学長の水谷修さんの基調講演が行われた。

基調講演の中で水谷さんは「外国人を外国人としてとらえ、日本語を教えるという考えでは成り立たない。生徒一人ひとりがどのように生きていこうとしているのかをくみ取り、何をどの順序で教えるべきかを考えて、そこに日本語教育を織り交ぜていくべきだ」と語った。

次に映像とパネルディスカッションによって各地の取り組みが報告された。パネリストは渡邊さんをはじめ地域で日本語教室を運営している人である。日本には外国人集住都市と呼ばれる地域がある。群馬県の太田市や静岡県の浜松市などには、ブラジルなど南米系の日系人が多い。東京の新宿区には韓国人が多く、中国人が多い地域もある。日本語学校の運営形態でも浜松の事例では市が主導し、小学校の中に設置されている。横浜市や松戸市はボランティアが推進している。



多数の参加者による市民フォーラムの様子

### 担当者より



若い世代の交流と可能性のために助成金を活用させていただきました。

NPO 法人  
国際日本語コミュニケーション研究所  
副理事長  
渡邊晋太郎さん

AJOSCの活動をこのたび初めて知り、立派な活動をされている団体があることに驚きました。私たちの活動は対象者が限られておりますが、日本のグローバル化にも欠かせない事業だと考えております。あたたかい目でも見守っていただければ幸いです。

「このように地域によって千差万別ですから、1つのマニュアルにすることはできないと改めて感じました。ただ今回語られた情報は他地域でも参考になることから、とても有意義なフォーラムができたと考えています」と渡邊さんは語る。

今回のフォーラムの全てを紹介することはできないが、それぞれが抱える独自の課題やノウハウは参加者たちに大きなインパクトを与えたようだ。長時間にもかかわらず、誰も席を立つことなく「これだけ具体的な内容に踏み込んだ討論は初めて」と賞賛の声があがった。

日本で暮らした外国人の子どもたちは、帰国後日本について語るだろう。どのような教育や思いやりを受けたのか、それによって日本の印象も左右されるはずだ。外国人の子どもたちへの日本語教育は、日本と世界との橋渡しも担っているのだ。